



朝日新聞
DIGITAL
TOKYO 2020

コロナ下、外出自粛や休業要請、酒類禁止のなか開かれた東京五輪。各界の方々がそれぞれの考えを述べ、数々指摘する。国民ひとり一人の思いと、どう整合するでしょうか。

全12回—2021年8月10日～

その1(①～⑥)、その2(⑦～⑫)

その1 ①～⑥ 語る東京五輪①

2021年8月10日

内輪の論理がたどる必然の帰結



コロナ下の開催に世論が分断されるなか、17日間にわたった東京五輪が8日、閉幕した。何を目指し、何を成し遂げられなかった大会なのか。歴史社会学者の小熊英二さんの寄稿は、戦後史の長い時間の流れの中に1964年と2021年を位置づける。

歴史社会学者 小熊英二さん

おぐま・えいじ 1962年生まれ。慶応大学教授。

著書に『単一民族神話の起源』『〈日本人〉の境界』『〈民主〉と〈愛国〉』『日本社会のしくみ』など。

東京五輪が閉幕した。1964年の東京五輪との対比で、今回の五輪を歴史的に考えたい。

菅義偉首相は15歳だった64年東京五輪で、聖火リレー伴走者を務めたという。今年6月9日の党首討論でも、東京五輪で感動した記憶を熱心に語った。東京五輪の印象が強いのは菅首相だけではない。読売新聞2011年3月21日掲載の世論調査では、「昭和の時代を象徴すると思う出来事」の1位は「東京オリンピック」だった。2位は「原爆投下」、3位は「バブル景気」。4位は「石油ショック」、5位は「真珠湾攻撃、対米戦始まる」だ。

＊

なぜ64年東京五輪は、これほど印象が大きいのか。それはこの五輪が、**日本の国際社会復帰を象徴**していたからだ。

日本は戦争で世界との国交や貿易関係を失った。52年のサンフランシスコ講和条約、56年の国連加盟を経ても、その影響は続いていた。たとえば外国為替取引は管理され、それを介して貿易や海外渡航も制限されていた。商用や留学など政府が認めた理由がなければ、外国へ行けなかったのである。この状況が解消されたのが64年だった。この年4月、日本はIMF（国際通貨基金）八条国となり、為替と海外渡航が自由化された。これと同時に日本はOECD（経済協力開発機構）への加盟を果たし、「先進国」と認められる形となった。

つまり日本にとって64年は、**戦争で途絶したヒト・モノ・カネの国際移動がようやく修復され**

た年だった。戦争で破壊された生活もやっと復興し、人々の気持ちも未来を向き、外に開かれようとしていた。64年東京五輪の開会式で、NHKのアナウンサーが「世界中の青空を全部東京にもってきてしまったような素晴らしい秋日和でございます」と述べたのは、こうした背景があったのだ。

＊

今回の東京五輪は、こうした64年の栄光を夢みて招致された。だが64年と21年では時代も社会状況も違う。五輪そのものも商業主義的になった。選手とスタッフは困難な状況下でも健闘したが、コロナ禍がなかったとしても、64年と同等の印象は残せなかったろう。

そのうえ今回の五輪では、関係者の「内輪の論理」が失態を招く事例が目についた。たとえば大会エンブレムは、ベルギーから盗作疑惑を指摘され撤回された。国際コンペで決めた新国立競技場の設計も撤回された。JOC（日本オリンピック委員会）会長は大会招致をめぐる贈賄疑惑でフランス司法当局の捜査対象となり退任した。さらに大会組織委員会会長や開閉会式演出担当などの辞任や解任もあいついだ。

それぞれの経緯を見ると、これらは日本の関係者の内輪ならあいまいに済まされていたかもしれない問題だ。しかし情報化とグローバル化が進んだ現代では、事態はすぐ国内外に拡散してしまう。そのため著作権侵害や女性蔑視発言なども、昔より大きな波紋をよびやすい。

＊

これに対処するには、個々人の意識の向上も大切だ。だがそれだけでは十分ではない。すべての人間が完全無欠ということはありえないからだ。

そのため現代では、人間は不完全だということを前提に、権利関係、選考基準、決定プロセス、責任の所在などを明確にしておくことが重視されている。これなら問題が起きても原因を特定できるし、国内外を納得させる説明責任を果たしやすい。

逆に最悪なのは、上層部や関係者の内輪で不透明な決定プロセスをとることだ。これだと問題が起きたとき基準や経緯を対外的に説明できない。また組織上の原因を特定できないので、問題を起こした個人の心得が悪いという以上に発展しない。だから個々人に辞任と謝罪をさせるだけで組織運営は変わらず、同じような問題をくりかえすことになる。これは「内輪の論理」がたどる必然的な帰結だ。

東京五輪が閉会し、聖火が消された。電光掲示板には「ARIGATO」と表示された=2021年8月8日、国立競技場、細川卓撮影

これは今の政府も同様だ。いつも官邸の内輪で決定し、問題がおきると「飲食店が協力しない」「若者に危機感がない」などと国民の心得を責め、同じような失敗をくりかえしている。だが本来なら、国民全員が完全無欠の優等生でなくても機能する制度設計に努めるのが政府の役割のはずだ。21世紀の国際イベントを前世紀の「内輪の論理」で主催するつもりだったなら、時代錯誤というほかない。

東京五輪の閉会式が行われた国立競技場周辺には多くの人が集まった=2021年8月8日午後8時2分、東京都渋谷区、山本裕之撮影

64年の東京五輪は、日本が未来をめざし、外に開かれた瞬間として記憶された。21年の東京五輪は、過去を夢みて始まり、「内輪の論理」が現代に通用しないことを露呈させた。ここから何を学び、未来にどう活(い)かしていくか。

それを考えることが「TOKYO2020」の本当の遺産となるはずだ。





【視点】「内輪ならあいまいに済まされていたかもしれない問題」が全世界に発信、可視化されたのが今大会の収穫なのかもしれません。昭和からのやり手のおじさん達が相変わらず上にいましたが、今回あぶりだされたのは今まで成功してきたノリに含まれる「価値観」が、2021年という時代や世界の潮流に合っていないことでした。その閉鎖性、差別性、古さ。内輪ならそのままあやふやにされていたのですが、今回はSNSと、マスコミというなら新聞やテレビではなく週刊誌の働きが光ったと思います。どちらも五輪の「神輿を担ぐ側」ではなかったことに共通点がある。週刊誌(文春)の働きの一つに、開会式演出のトップがいつのまにか佐々木宏氏になっていた経緯を報じたことがあります。佐々木氏はタレントへの侮辱発言の責任をとって辞任しましたが、それとは別に経緯に何があったのかを公の場で語るべきだと思います。排除された人はいなかったのか？それによって無駄になってしまった案はなかったのか？税金を投入してるので公共の大問題です。とくに都民は「利害当事者」と言っている。内輪で一体何がおこなわれたのか、マスコミは森喜朗氏や佐々木宏氏に公の場での説明を求めてください。



田中俊之 社会学・男性学研究者 2021年8月10日投稿

【解説】小熊英二先生は日本を代表する社会学者であり、歴史の分野において大著を数多く執筆されています。膨大な資料に基づいた緻密な歴史分析は、右に出る者がいないと言っていいでしょう。僕も多くを学ばせてもらっています。「私は社会と関係ありません」とか「私が動いても社会は変わらない」というのは、悲観でも楽観でもなく、たんに不可能です。自分が存在して歩いたり働いたり話したりすれば、関係に影響をおよぼし、社会を変えてしまいます。政治に無関心な人、不満があっても動こうとしない人が増えれば、確実に社会を変えます。自分が望む方向に変えるように行動するか、自分が望まない方向に変えてしまう行動を取り続けるのかの違いです。以上是小熊先生のご著書『社会を変えるには』（講談社現代新書）からの引用です。今回のオリンピックに関して反省的に捉え直そうとしない人が多ければ多いほど、「内輪の論理」の限界がこれだけ明らかになっても、「内輪の論理」がはびこり続けることになります。閉幕したオリンピックをめぐって何が語られるのか、そして、何が語られず忘却されていくのかしばらく注視したいと思います。

語る東京五輪② 残念な五輪、 2021年8月11日

日本の問題点の総決算だった



クリエイティブディレクター

辻愛沙子さん

つじ・あさこ 1995年生まれ。企画会社「arca」代表。社会派クリエイティブを掲げ、イベント、商品企画、新規ブランドなどを手がける。日本テレビ系「news zero」で水曜パートナーとして出演中。

8日に幕を閉じた東京五輪。コロナ下での開催に世論は分かれ、開催直前まで

様々なトラブルが起きた一方、競技が始まると多くの感動や選手たちのドラマも生まれた。クリエイティブディレクターの辻愛沙子さん(25)は「これまでに起きた問題を風化させてはいけない」と指摘する。若い世代を代表する一人として、今回の大会を振り返ってもらった。

—東京五輪が終わりました

女性の競技者数が増えたり、スケートボードやサーフィンなどのマイナースポーツが盛り上がった、個人的にポジティブな側面もゼロではなかったと思います。コロナ禍で多くの国民が我慢を強いられ続けている中、どこか五輪に希望を求めているような空気も一部では感じていました。

ただ、開会前から数えきれないほどの問題が次々と噴出し、ただでさえコロナ禍で日々の生活が大変な中、多くの人にとって度重なる不祥事や問題の全てを追い切る余裕がなかったのではと思っています。点で声は上がっていたものの、線でそれらを捉えることが難しいほどに問題が相次いでいました。

開会式前日、ツイッター上で五輪招致から開催までに起きた出来事を整理し直すウェブ番組を企画しました。振り返ってみると、国立競技場やエンブレムの問題、膨れあがった予算、招致活動の買収疑惑、ずさんなコロナの水際対策、開会式の演出メンバーのトラブルなど様々なことがあった。**多くの問題がうやむやにされたまま、勢いで開催されてしまった**気がします。

それぞれの問題の背景には、性別や年齢に偏りのある同質性の強い運営体制、意思決定のプロセスの不透明さなど、様々な課題があります。五輪を巡る一連の出来事は、**今の日本社会が抱える問題点の総決算**のように感じました。私たちの**倫理観や文化的成熟度を改めて問い直すきっかけ**になったのではないのでしょうか。

—様々なトラブルを経て開かれた開会式の印象は

日本の**クリエイティビティーと多様性への理解の薄さ**が表面化したな、という印象です。**度重なる運営体制の変更で、一貫性のないツギハギな演出**になり、メッセージ性を感じられなかった。

いくら表層で多様性を掲げていても、実態が伴っていなければそれは単なるマイノリティーの商業利用でしかありません。例えば、開会式で登場したLGBTQの象徴であるレインボーカラーを使用したドレスや、閉会式で使用された「Chosen Family」という、選択肢を持たず傷つくLGBTQに向けて作られた楽曲。作品としてはどちらも素敵で私自身大好きですが、現代の日本社会では、いまだ当事者の権利保護や同性婚の法整備がなされていない現状があります。**当事者置き去りのパ**



フォーマンスのように感じました。

東京五輪の開会式=2021年7月23日午後10時37分、国立競技場、恵原弘太郎撮影

もう一つの残念だった点は、**日本文化やクリエイティビティーへの愛や誇りが感じられなかった**ことです。開会式の楽曲はいずれも素晴らしいものばかりですが、なぜ日本に数多く存在する才能や素晴らしい楽曲ではなく、英国ロックバンド「Queen（クイーン）」の曲やジョン・レノンの「IMAGINE」をあえて選んだのか。国内では、コロナで疲弊し、多くの文化芸術に携わ

る方々が悲鳴を上げる中、そこに対するエンパワーメントやメッセージはないのかとひどく残念に思いました。「復興五輪」のメッセージもいつのまにかフェードアウトしてしまいました。

選手入場の際に流したゲーム音楽も、少しモヤッとするところがありました。私個人はゲームが大好きなのでうれしかった楽曲もありましたが、同世代の女性たちはあまりピンときていない人も多かった。ある世代の男性ファンが多い選曲だったように感じ、意思決定の場の同質性を改めて感じました。選曲の中に、差別発言を擁護していたクリエイターの楽曲も含まれていました。テーマである**「多様性と調和」を感じられない演出**が多々あったように思います。

—河村たかし・名古屋市長が女性選手の金メダルをかじり、批判を受ける出来事もありました

日本の**パワハラとセクハラの問題が凝縮**されたような話です。もし表敬訪問したのが、身長2メートルのごつい男性選手なら同じことをしたでしょうか？ もっと年上のベテラン選手だったら？ そもそも若い女性選手に対する「なあ」という呼びかけも含め、相手へのリスペクトがないように思いました。周囲が誰も止めなかったことにも違和感があります。同じような出来事が日本

社会のあちこちで起きているような気がして、しんどくなりました。
河村たかし・名古屋市市長(左)が、東京五輪ソフトボール後藤希友投手の金メダルを突然かじった=8月4日、名古屋市役所、関謙次撮影

そもそも金メダルを取った選手が、市長に報告に行くこと自体どうなのでしょう。選手を称賛したいのなら市長から出向いてもいいじゃないですか。こうした**形式的な儀礼**も今後は見直していく必要があると思います。

ただ、社会全体で見れば、こうした行動を問題だと捉えられるようになったという意味で、前進していると言えます。10年前ならここまで問題になっていなかったかもしれないですから。森喜朗氏の女性蔑視発言も同様です。

—この五輪の経験をどう生かすべきでしょう

一つ一つの問題をなかったことにしないことです。風化させないよう、目を背けずに向き合い声を上げていかなければいけません。

スケートボード女子パーク決勝で、最後の大技が決まらず4位が確定した岡本碧優選手を他の選手たちが担ぎ上げた=8月4日、有明アーバンスポーツパーク、北村玲奈撮影

改めて一連の不祥事や問題点を、点で捉えず線で振り返っていく必要があります。大会後のつけを払うのは私たち国民です。大会の開催には多額の税金が使われていますし、コロナの感染者も確実に増えている。決してひとごとではありません。開会後から「始まったんだから楽しもうよ」という言説を一部で目にしましたが、**競技を楽しむことと政府や運営側に対する批判は別**の話です。声を上げることは、日本社会でネガティブに捉えられがちです。でも声を上げなければ、この先で誰かが苦しんだり、自分が泣いたりするかもしれない。「これおかしいよね」って周りとは話すだけでもいい。それを踏まえて、今度の衆院選が、私たちにできる大きな意思表示の場だと思っています。

最後に、若い世代が活躍したスケートボードの試合で、メダルが取れなくても、転んでしまっても、挑戦する姿勢自体を選手同士でたたえ合う瞬間があり、希望を感じました。表面化した課題をいくつも抱えるこの権威主義的な日本が、**未来を担う世代の姿勢から学ぶことがたくさんある**ように感じます。
(聞き手・小瀬康太郎)



語る東京五輪③

元外相 **田中真紀子** 2021年8月12日

五輪の宴「次は政治が問われる番」



東京五輪では、コロナ禍の中で開催した日本政治の判断が問われた。かつて自民党と民主党の両方の政権で閣僚を務めた田中真紀子さん(77)は、どう見ていたのか。

たなか・まきこ 1944年生まれ。元衆院議員で科学技術庁長官、外相、文部科学相を歴任。田中角栄元首相の長女。

—今回の東京五輪は何を残したのでしょうか

多くの選手が与えてくれた**素晴らしい感動と、日本政府のあいまいで無責任な態度の**

対比が鮮烈でした。

東京五輪にはコロナの感染拡大より前から反対でした。商業主義で肥大化した五輪を財政難の日本が受け入れること自体が問題だからです。招致を進める政府への不信を強めたのが、安倍晋三首相が2013年に、福島第一原発の汚染水は「アンダーコントロール（管理下）」だと世界にアピールしたことです。そんなごまかしで五輪を招致しておきながら、処理済みとはいえ汚染水を「コントロール」しきれなくなり、今年になって後継の菅義偉首相が地元や海外の反対を顧みずに海洋放出する方針を決めています。コロナ禍の中での五輪開催も、同様のごまかしでした。

—東京をはじめ各地に政府が緊急事態宣言を出す中での開催となりました

今は都内の一主婦ですが、昨年五輪が延期された時よりもコロナは相当身近になってきています。感染したり、別の持病が悪化してもすぐに入院できなかつたり、がんの手術を受けられなかつたりという知人がいます。そんな時に世界最大のスポーツイベントを開いたらどうなるか。

例えば町内会の盆踊りの音がすぐ隣から聞こえてきたら、窓を開けてのぞきたくなる。それが人間というもの。移動するな、じっとテレビで五輪を見ていると言っても無理ですよ。夏休みで子どもたちも家にいて、外に出かけようかとなります。感染拡大との関係は大ありだと思います。

—そういうことを政治家がわかっていないと

菅首相や小池百合子都知事、大会組織委員会の会長を森喜朗氏から継いだ橋本聖子氏は、国民の生活や感情を深く理解せずに、世論調査で五輪反対が多くても開催すれば国民は喜ぶという考えで、安倍首相の頃からずるずると来た。森氏が首相の頃、無党派層は選挙で「寝てしまってくれれば」と語ったのと同じで、民意の軽視そのものです。

国立競技場代々木競技場の建築で朝日賞を受賞した設計者で建築家の丹下健三氏

—どうして日本の政治はそこまで五輪にこだわるのでしょうか
国威発揚や政権浮揚への思惑でしょう。確かに1964年の東京五輪は、敗戦から20年目で高度成長期のただ中であつた日本にとって成功体験でした。代々木の国立競技場を設計した丹下健三先生がしばしばうちに来て、いろんな案の図面を広げて楽しそうに相談され、蔵相の父（田中角栄氏）が「予算は任せなさい。とにかく立派な五輪にしよう」と熱っぽく応じていたのを思い出します。

でもあれから半世紀以上も経つのに、政府が「夢よ再び」と考えていたのならお粗末の極みです。

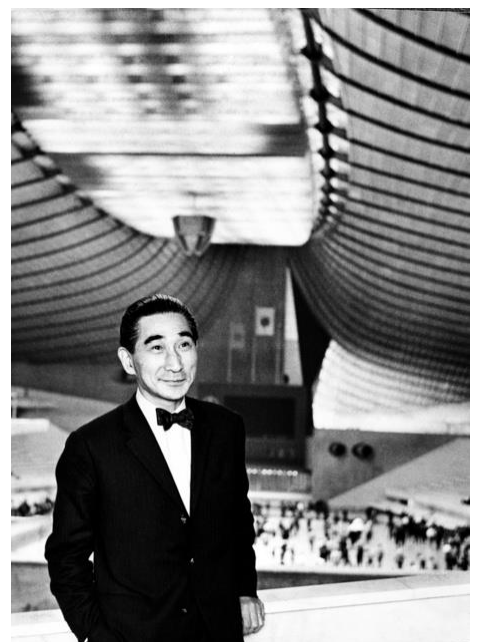
コロナに悩む国民の感覚とずれている上に、そもそも五輪自体が変化しています。亡命、人種差別への抗議、難民選手団、LGBT—。選手たちが表す世界の課題に日本がいやでも向き合う場になっているのです。

予算案作成の大詰めを迎えた朝、池のコイを呼ぶ田中角栄蔵相

—コロナ禍で国民が五輪のあり方を注視したことで、日本の政治の貧困が浮き彫りになったのでは

その通りです。それなのに今の政権与党はひどすぎる。コロナ禍の中での五輪開催という非常事態なんだから、柔軟に対応できるよう国会を開いておくべきなのに閉会し、野党の召集要求に応じない。知り合いの自民党衆院議員たちは次の選挙で落ちないようと地元を走り回っています。

五輪という真夏の宴（うたげ）は終わりましたが、コロナ禍や財政難は深刻さを増すばかりです。



次は選挙で日本の政治が問われる番です。五輪についても、開催への経緯や感染拡大との関係を、会計監査とともにいち早く総括し、国民に示すべきです。テレビを見てりゃいいなんてなめています。国民はしっかり見ていますよ。
(聞き手 編集委員・藤田直央)

朝日新聞 DIGITAL TOKYO 2020

語る東京五輪④ 2021年8月13日

「気晴らし」か「余暇」か ギリシャ哲学から考える五輪

西洋古代哲学



納富信留さん

のうとみ・のぶる 1965年生まれ。哲学者、東京大学大学院教授。元国際プラトン学会会長。専門は西洋古代哲学、西洋古典学。著書に『ギリシア哲学史』『プラトンとの哲学』『哲学の誕生』『ソフィストとは誰か?』など。

新型コロナウイルスの感染が急速に拡大

するなかで開かれた東京オリンピックが閉幕した。開催をめぐっては賛否が分かれ、オリンピックの魅力や意義を改めて見つめ直す機会ともなった。原点といえる古代ギリシャのオリンピックに通じる納富信留（のうとみ・のぶる）・東京大学教授（西洋古代哲学）に聞いた。

—東京オリンピックをどう振り返りますか。

「復興五輪」や「コンパクト五輪」を掲げた招致の段階から違和感があり、大会運営の面でもずさんで無責任としか言いようがない問題が続出しました。開幕後も冷や冷やしながらかみ守りましたが、無事に終わられてよかった、というのが第一印象です。

コロナ禍のなかの今大会は、オリンピックの是非について、関係者や開催都市だけでなく各国の選手や世論まで巻き込む形で国際社会の全員が論点を共有し、いや応なく問い直す機会になりました。今までずっと開催してきたからこれからも開催するといった惰性ではなく、オリンピックをなぜ開催するのかという本質的な意義を根っここのところから問い直すきっかけになったのではないのでしょうか。

—オリンピックはなぜ人をひきつける魅力があるのでしょうか。

125年の歴史に過ぎない近代オリンピックは、古代ギリシャのオリンピックを理想としました。紀元前8世紀から紀元後の4世紀にかけての1100年超の間に計293回開かれた伝承が残る古代オリンピックは、ポリス（都市国家）が多数ひしめき合うギリシャ世界の神ゼウスに捧げる宗教的な祭典で、ローマ帝国統治下でも長く続きました。古代ギリシャの競争（アゴン）的な文化と地中海世界の平和や協調を体現した場でした。

現代オリンピックは、欧米の主要国がそうした古代ギリシャのオリンピックを美化し、自らの理想像を投影して生み出したものです。競技・種目数や参加人数が多く、今では、サッカーW杯などの他のスポーツイベントや、国連総会や主要国首脳会議（サミット）などの国際会議を超えた唯一

無二の国際交流の場となっています。200を超える国・地域の選手や市民ボランティアなどに開かれたオープンさと、誰もが巻き込まれているような一体感があります。

—現代のオリンピックが古代から引き継いだものとは何でしょうか。

現代のオリンピックの魅力の核心部分は、**肉体と精神を究極まで鍛錬した選手が競い合う姿**と、そうした**運動競技を通じて交わされる国際交流**ということになるのでしょうか。

東京オリンピックでも開催直前まで大会運営のあり方を批判し、中止を訴えていた多くのメディアや世論が、競技が始まれば選手の活躍に注目し、勝者の栄誉や敗者の健闘をほめたたえました。「手のひら返しだ」と冷ややかな声もありましたが、古代と現代に共通するオリンピックの本質は「集まる、観（み）る、讃（たた）える」。多数の参加者が集まり競い合う姿を大勢の観客が目撃し、人間の持つ可能性を切り開いた優勝者の栄誉がたたえられる。そうしたオリンピックの求心力は、ほぼ無観客の今回も、競技の模様を伝えるメディアやネットを通じてかろうじて維持されました。

—競技に参加する（集まる）選手だけでなく、「観る」側の観客や「讃える」側の社会なども必要とされるのですか。

神に捧げる宗教行為だった古代オリンピックでは**観客も重要な役割**を担いました。古代ギリシャでは、人が見たり考えたりする行為を「テオリア」（観照・観想）と呼んで重視していました。「より速く、より高く、より強く」という比較級の形で神に近づくことを目指す選手たちの実践活動に対し、競技を見ることも神の視点に近づく行いだったと言えます。

今回の無観客に似て、古代でも開催地オリンピアまでやってくる観客は限られていました。**優勝者の栄誉は、祝勝歌や祝勝会を通じて遠く離れた出身都市などに伝えられ、実際に見ていない人にも広く共有**されました。

ギリシャ・オリンピア遺跡のヘラ神殿で採火された東京五輪の聖火=2020年3月12日、代表撮影



—オリンピックのもつ普遍的な価値は分かりましたが、今大会はコロナ禍を理由に中止を求める世論も根強くありました。現代のオリンピックがはらむような問題点を指摘する声はなかったのでしょうか。

現代のオリンピックはこれまでも様々な批判にさらされてきました。商業主義、開催地の財政負担、政治利用やナショナリズムなどの弊害です。**古代ギリシャにもオリンピックを批判**する知識人がいました。競技参加者が専門化して精神と肉体の均衡を失っている、優勝者が過度に優遇されている、政治指導者や富裕層が権力や富を誇示する場になっている、などと現代にも通じる論点が見られました。

ソクラテスやプラトンなどの哲学者たちは、オリンピックの価値を認めながらも一定の距離を置き、**勝利や名誉の追求よりも深い考察を重ねる「知への愛（フィロソフィア）」を重視**しました。「善き生き方」に近づくためには「文芸」と「体育」の両方が必要としたうえで、**体育は単に肉体を鍛えるためではなく、魂のバランスを保つため**のものとしたのです。

プラトン『ポリテイア（国家）』でソクラテスは、優れた肉体が優れた魂を生むのではなく、「肉体は、それがすぐれた肉体であっても、自分のその卓越性によって魂をすぐれた魂にするというものではなく、むしろ反対に、すぐれた魂がみずからのその卓越性によって、肉体をできるだけすぐれたものにするもの」だと語っています。

—オリンピックの本質を考えるためには、スポーツの本質を考えなければならない気がします。

オランダの歴史家、ヨハン・ホイジンガは著書『ホモ・ルーデンス』で「人間は遊ぶ存在である」とし、**人間の本質を不要不急の「遊び」に見いだします**。ホイジンガ自身は、現代のスポーツは勝利至上主義や商業主義などの弊害により「遊び」の要素を失っていると考えましたが、それでも私たちは今大会で勝利の追求にとどまらない選手の言動をたびたび目にしました。

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、単なる気晴らしである「遊び」（パイディア）と、人

が人らしく生きるために必要で人生の目的となるような「余暇」(スコレー)を区別し、後者の「余暇」に高い価値を置きました。

オリンピックが、スポーツそのものが抱える問題や政治経済や社会の問題から目を背け、一時的な麻薬のように楽しむ「気晴らし」に過ぎなかったのか、それとも、スポーツそれ自体の魅力や意義を理解し、それぞれの人間らしさを実現するための「余暇」の一環としてオリンピックに感動したのか。「観る」側の私たちの姿勢が問われています。

厳しい批判の声に直面した選手たちは競技後、口々に「参加できてよかった」と感謝の言葉を述べました。北京冬季五輪も来年に迫っており、観客の私たちは、コロナ禍中の一服の清涼剤として「見世物(みせもの)」のように消費するだけでなく、**より高い人間性を実現するために**オリ



ックやスポーツのあるべき姿を議論し続けなければなりません。

東京五輪の開会式が無観客で行われる中、国立競技場に花火が上がった。沿道ではタブレットなどで開会式を視聴する人の姿もあった=7月23日午後8時32分、瀬戸口翼撮影

—オリンピックと哲学の関係は、運動が好きな体育会系と運動が苦手な文化系の対立を連想させます。

オリンピック憲章の冒頭には「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である」という一節があ

ります。哲学者や歴史家、文学者がほとんど関与しなかった東京オリンピックは「哲学不在」だったのではないのでしょうか。

現代のオリンピックは、19～20世紀の欧米諸国が国際協調に向けて共有できる理想が古代ギリシャだったという歴史的・文化的背景によるもので、過度な美化は避けなければなりません。ただ、オリンピックの魅力や意義が完全に失われたわけではないとするなら、原点に立ち返った改革を模索すべきです。

閉幕後は、収支悪化に伴う赤字をどう負担するかなどが焦点となり、再びオリンピック批判の声が強まるはずですが、東京は間に合いませんでしたが、コロナ禍や高度情報化、気候変動など社会環境の変化に応じた競技内容や開催方法、政治やメディアとの関係などを考える時期にきているのは明らかです。今後このような大会を続けるかどうかも含めて広く深く、是々非々の議論を重ねるなかから新たなオリンピズム、いわば**オリンピック哲学を打ち立てる**べきです。(聞き手・大内悟史)

語る東京五輪⑤

2021年8月16日

イベントの適正サイズ、考える契機



日本総研マクロ経済研究センター

石川智久さん

いしかわ・ともひさ 1974年、北九州市生まれ。三井住友銀行を経て2017年から2年間、日本総研・関西経済研究センター長を務める。19年7月から現職。著書「大阪が日本を救う」。

コロナ禍の中で開かれた東京五輪は、感染対策で無観客となり、国内外からの大規模な集客を前提としたイベントのあり方に一石を投じた。今回の経験を3年半余り後に控える大阪・関西万博にどう生かしていくべきなのか。日本総合研究所マクロ経済研究センターの石川智久所長（46）に語ってもらった。

—今回の五輪は何を残したと考えますか。

「イベントの力を再認識」できました。反対派も多かったですが、開会式の視聴率は6割近く。開会式では約1800台のドローンが地球儀などを描き、いまでも新技術で感動を生み出せることを証明しました。競技を通じて日本の若者の頑張りも示せました。『終わったコンテンツ』だと言う人も

いますが、決してそうではありません。今でも普遍的なメッセージを残せるというのが正直な感想です」

大阪・関西万博の会場のイメージ。円状の回廊が「大屋根」=日本国際博覧会協会提供

「トータルでは開催してよかったと思いますが、SDGs（持続可能な開発目標）の取り組みがきちんと実現できなかったのは課題です。女性蔑視発言などが明らかになり、多様性や調和（ダイバーシティ&インクルージョン）に本気でないのではと感じました。差別のない世の中をつくりたいのかが見えませんでした。多くの弁当も廃棄されました。反省しないといけません」

大阪・関西万博の予定地=大阪市此花区

—コロナ時代のイベント開催にどんな影響をもたらしましたか。

「イベントの適正サイズを考えるきっかけになりました。イベントは放っておくとどんどん大型化しますが、大きければよいのかという

問題があります。例えばコロナ後にパンデミックが再び起きた時、海外の客に来てほしくても、国内中心にパッと切り替え、海外はオンラインで楽しんでもらう。不測に備える『コンティンジェンスプラン（危機対応計画）』が大事で

す。バーチャルで味わうことで、リアルでも見に行きたいと思ってもらえる仕掛けも必要です」

—今回の経験を万博にどう生かすべきですか。

「万博はSDGsの祭典としているので、本気で取り組まないといけません。例えばパビリオン（展示館）を閉幕後に普通に取り壊せば、サステイナブル（持続可能）ではありません。パビリオ



ンを食べられるようにしたり、木や土でつくって自然に戻したり、どこかに移築したり。いろんな発想があっていいと思います」

「万博は多くの人に関わるイベントにしないといけません。五輪開催中に5千億～6千億円の経済効果があるとみていましたが、かなり減りました。無観客になり、ボランティアも想定ほど活躍できませんでした。万博の開催期間は半年と長く、各地にサテライト会場もできます。

日本人全員がかかわろうと思えば可能です。経済効果も大きくなると考えています」

——万博は関西経済の起爆剤になりますか。

「一番分かりやすいのは観光客の増加です。万博はいわゆる『ショービジネス』でもあります。開催後、会場の大阪・夢洲（ゆめしま）にIR（カジノを含む統合型リゾート）ができれば、万博は夢洲がリゾート地として発展するきっかけにもなるでしょう」

「もう一つは、万博でいろんな商品が展示されることです。新たな産業の起爆剤になる可能性があります。大阪万博が開かれた1970年は（万博で日本初のファストフード店舗が出店されたため）外食元年と言われました。携帯電話も展示されました。万博で見た新しい商品やサービスをどうやって関西の地場産業にしていけるか。産業に育てようと思う人がどれだけ出てくるかが重要です」

（聞き手・箱谷真司）

試算超える感染拡大 五輪の影響は



大阪大医学部教授

忽那賢志さんに聞く

くつな・さとし 国立国際医療研究センター国際感染症対策室医長を経て、大阪大医学部教授。専門は新興再興感染症など。

国立国際医療研究センターで診療に携わり情報発信を続けてきた大阪大学の忽那賢志（くつなさとし）教授に聞きました。

——新型コロナ感染拡大を受け、7月8日、東京五輪について政府や大会組織委員会などは首都圏の会場を無観客にすると決めました。

無観客と決めたことは、感染を広げないという意味ではいい判断でした。感染対策を考えるなら、ワクチンを希望する人にいきわたるまでもう1年延期したほうがよかったと思います。ワクチンが広い世代にいきわたっていれば、今のような感染状況にはならなかったでしょう。

——この時点でワクチン2回接種を終えた人は全国で約15%にすぎませんでした。一方、感染力が強い変異ウイルスのデルタ株の猛威が懸念されていました。東京ではそれまで主流だった変異ウイルスのアルファ株から置き換わりが進み、2割程度になっていました。

いずれデルタに置き換わるのは海外の状況をみれば明らかでした。政府が想定していた以上に広がりやすかったといえます。医療態勢が逼迫（ひっばく）することは予測できました。デルタ株はアルファ株より感染力が強く、入院リスクも高いという報告もありました。

——実際、デルタ株が占める割合が増えていくとともに感染者数は急増、8月5日の東京都の新規感染者は5千人を超え、その後も4千人以上の日が続きました。

現実には、数理モデルで試算された数を超えるほどの勢いでした。モデルを超えることはあまり見たことがありませんが、普通じゃなかったということでしょう。数字の上だけでなく、子どもに広

がったり、百貨店のクラスターが報告されたりと、今までなかったようなことが起こりました。
—そんな中で開かれていた五輪をどうみましたか。

緊急事態宣言の中で五輪やっている光景はシュールだなと思っていました。祭りをやっているのに、「外に出るな」と言っているんですから。

—感染拡大に五輪の影響はあったと思いますか。

五輪で盛り上がり、感染対策にゆるみが出てもおかしくないし、人流が増えるほうに傾く気はしますが、人の気持ちは数値化できないので因果関係はわかりません。五輪が直接、感染者を増やしたということはないのかもしれませんが、感染対策が遅れた要因の一つになった恐れはあります。
—五輪は何を残したのでしょうか。

わかりません。感染症の視点で考えたときに、五輪に良い面と悪い面があったとはいええます。五輪に注目が集まり、人の注意がコロナからそれました。たとえば、首相が金メダルをとった選手に電話をかける場面が流れ、その後でコロナのニュースになる。五輪ニュースが増えると、コロナがたいへんな状況になっているというニュースは減ります。人の注意がそれたことで対策が遅れ、医療態勢が逼迫し、コロナ以外の病気にもすぐに対応できないような状態になった可能性はあったと思います。



一方、五輪の意義としては、1年半のコロナ禍で疲れている大勢の人が、選手の活躍を見て励まされ、勇気をもらいました。ストレス解消になる効果がありました。五輪を見て勇気づけられた人には、もう一度、気持ちをリセットして感染対策を強化しましょう、と言いたいです。

忽那賢志・大阪大教授=2021年8月12日、大阪府吹田市

—昨年からウェブで記事を書いたりテレビに出演したりして、感染状況や対策の情報発信に努めてこられました。

誰にとっても自分ごとであるはずなのに、自分ごとであることが伝わらなくなっています。とくに感染の中心になっている20~30代に伝わりません。届けるべきところに届いていないのです。何がどう危険なのか正しい情報を伝えることも大切ですが、どういう手段で伝えるかも問題です。若い人たちに影響力がある人に働きかけるなど、考えていかないといけないと思っています。
—まだどんな病気なのかも伝わっていない面がありますね。

とくに若い人は、感染するまで、自分は重症化しないと思っている人が多いです。デルタ株は、若い人、基礎疾患がなくても重症化することがあると知っていただく必要があります。倦怠（けんたい）感が続いたり、脱毛といった後遺症が出る人もいます。軽症、中等症、重症のイメージに専門家と一般のギャップもある。中等症でも十分苦しい病気です。

—今後も新たに脅威となる変異ウイルスが出てくる恐れもあります。

もとの新型コロナウイルス、アルファ株もデルタ株も海外から入ってきました。今後、もっと感染力が強い変異ウイルスが生じる恐れがないとはいえません。日本は島国で、感染症対策には有利なはずですが、海外で拡大したものの侵入を完全に止めることはできないかもしれませんが、できるだけ遅くすることが必要です。水際対策を徹底して、新たに脅威となるウイルスの侵入をできるだけ遅くし、国内で見つかった時には、濃厚接触者を調査して隔離し、広げないようにする必要があります。デルタ株のようにしない体制を作らなければなりません。（聞き手・瀬川茂子、矢田文）

続く その2 ⑦~⑫

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

(黄色地紋 林 莊祐)